マニア魂！

# MESSAGE

田村美葉
TAMURA Miha

**プロフィール**
1984年生まれ、石川県金沢市出身。東京大学文学部卒。会社員。大学入学を機に上京して以来、東京独特の風景に魅力を感じ、休日は諸々の偏愛活動に費やす。日本でおそらく唯一ぐらいのエスカレーター専門サイト『東京エスカレーター』の運営、「高架橋脚ファンクラブ」の会長職を務めるほか、コカコーラ看板やJCBつかえます看板、「ニュー」のつく建物など、主に昭和50年代～バブル崩壊までの“わかりにくいレトロ”に妙に関心が高い。あと都市河川が好き。主にそういう内容の記事を、@ニフティデイリーポータルZで月1回執筆中。

高架橋脚ファンクラブという組織の会長を務めている。会員は現在250名強。高架橋脚と聞いて、「ははぁ、またよくわからないマニアがやってきたなぁ」と思われた方はその数字にだいたい驚かれるが、250名、いるんですよ、たしかに。

きっかけは、日本橋川の上にかかる首都高の高架を見たときからだったと思う。テレビで何度も見ていた、渋谷のスクランブル交差点や、新宿の都庁、お台場のフジテレビなんかの「東京」の光景には特に都会を感じなかった私だが、川に橋脚がにょきにょきと生え、何層もの立体都市を構成するジャンクションの様を初めて見たとき、カルチャーショックを覚えた。川に沿って歩き、橋で立ち止まっては写真を撮るようになって、狭い土地に苦労して複雑な形になりながら立つ、都会ならではの橋脚ひとつひとつが、だんだん愛おしくなってきた。そこで立ち上げた高架橋脚ファンクラブだが、これが意外に、ジャンクション好き、鉄道好き、橋ファン、土木工事オタクなど、いろんな観点から「橋脚」に興味を持つひとびとを横断的に束ねる一大組織となっている。

組織化してなにをしているかというと、会員同士で連れ立って、めぼしい橋脚をめぐるツアーを行ったり、橋や高架の工事があると聞いては観に行ったり、新しい道路の開通前イベントに参加したり、手羽先を食べたり、そばを打ったりしている。最後のふたつは橋脚となにも関係がないが、会員それぞれがなんだか好きなことをやりはじめている大人の仲良しクラブである。

第1回の高架橋脚ファンクラブツアーでは、工事中であったさがみ縦貫道を観に行った。工事現場の近くまで行って、にょきにょきと立ち並ぶ壮観な橋脚群や、ジャンクションにならんとしている高低さまざまな橋脚に、「いいねぇ」「いいよねぇ」などとうなずきあいながら、静かに次の場所に移動するという、マニアでも関係者でもなく、ファン以外のなにものでもない活動に勤しんでいたところ、ちょうど工事作業に入る現場の方に声をかけていただいた。怒られる!と思って会長たる私はまっさきに早足で退散しようとしたのだが、「そういうことならば」と急遽「地域貢献　高架橋脚ファンクラブ　工事見学会」を開いていただき、「せっかくだから」と全員でまだ工事中の橋脚にのぼらせていただいた。嘘のような本当の話だ。ビギナーズラック。

勢いあまって船をチャーターして川にはえる橋脚を堪能することもある。おすすめは、なんと言っても日本橋川と、東京モノレールの高架を川から眺めながら羽田まで行って新しくできたD滑走路をぐるっとまわって帰ってくるコース。D滑走路は多摩川河口にせりだした部分が桟橋構造になっており、錆に強いステンレスの銀色に光り輝く橋脚が立ち並ぶ様は神殿のようで、橋脚たちの聖地に認定されている。

川をふさぐ高架はしばしば悪者にされがちだが、実際に船で行ってみるとわかるのは、常に日に照らされ雨を遮るものもない水上で、屋根になってくれる高架は、小さな船を持つひとびとにとって、この上ない設備だということだ。より近くに寄って橋脚を楽しむには、手漕ぎが一番。横浜や東京江東区の河川では、最近カヤックを楽しむひとをよく見かけるが、私が購入したのはスタンドアップパドルという、立ってパドルを持って漕ぐ、サーフィンのようなボードである。わりと簡単に誰でも楽しめ、動力船では行けないところまで行けるのでおすすめだ。

ファンクラブも3年目を迎えるとだんだんなれ合いになってきた感は否めない。橋脚にかこつけて(あるいはかこつけないで)みんなでわいわいやっているだけなのではないか、いくら仲良しクラブといえどもこれではいかん、と思い、平成24年末の首都高50周年の折には首都高環状1号線、Circle1を1日かけて1周するウォーキングツアーを行った。地図上では約15km、4時間の予定だったが、みんながいちいち橋脚を写真に撮り、おもしろいポイントがあると立ち止まるせいで11時にスタートして昼休憩を挟みゴールは19時だった。12月に8時間も高架の下をうろうろする、それでこそ橋脚ファンたるもの。次の目標はCircle2の1周である。

会員達はどうだか知らないが、会長としての私の野望は尽きない。会員となった以上、どこまでもつきあっていただこうではないか。

首都高Circle1ウォーキングツアーにて
(写真：田村美葉)